

心理学の専門家が解説



川合伸幸さん
本人提供

「はるか昔、私たちの祖先はへびに食べられてきたので、今の私たちも、こわいという感覚を持ち続けている」
こう話すのは比較心理学などを研究する、名古屋大学教授の川合伸幸さんです。

心理学では、恐怖は全て経験によるものと考えられていました。その場合、こわくないということを書けば恐怖は消えると考えられますが、消えない場合もあることがわかってきました。

そこで、動物には本能的にこわがる対象が「準備」されているのではないかと考えています。

スウェーデンの心理学者アルネ・エーマンさんたちが、多くの人がこわがるへびやクモに対して、生まれ持つてこわいと思うのかを調べました。実験の参加者にへびやクモの写真と、花やキノコの写真を見せながら電気ショックをあたる実験です。恐怖を

感じているかどうかは、毛が逆立つような感じになるかで判断します。

実験では、へびの写真を見て電気ショックがあたえらる人と、キノコの写真を見て電気ショックがあたえられる人がいましたが、すぐにどちらの人も写真を見るだけで恐怖を感じるようになります。

その後、恐怖を消すために、写真だけ見せて電気ショックをあたえないということをくり返します。その結果、へびやクモの写真は、花やキノコの写真よりも恐怖を消すのに時間がかかることがわかりました。そのほか、銃など命に関わるようなものについても、へびよりも短い時間で恐怖を消すことができたそうです。

この結果から私たちに、遠い祖先にとって恐怖の対象であったへびへの恐怖が残っているといえます。

6500万年前ころから木の上で暮らし始めた私たちの祖先は、唯一の敵のへびをすぐに見つけることができれば、食べられずにすみました。そこで川合さんは、危険な

な話 【ジェットコースターとの共通点】

なぜ、生まれつき恐怖を持っているはずのへびに対して、好きだと思う人がいるのでしょうか。川合さん

は、ジェットコースターを例に挙げ、「へびを見たときに感じるぞくつとした感覚をこわいと解釈する人もいれば、それをわくわくすると思う人もいます」と話していました。



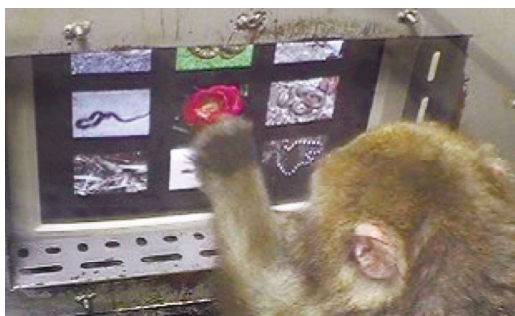
©朝日新聞社

もらいます。

結果は、へびを見つめる方が早く、花の写真をコアラや鳥といったほかの動物に替えても同じ結果になりました。

さらに、一度もへびを見たことがないサルにも、へびと花の写真を使って、仲間はそれを探す実験をしたところ、人間と同じ結果に。別の実験で、人間の赤ちゃんもへびに対してなんとなく恐怖を持っていることがわかっています。

これらのことから、人間とサルの共通の祖先がへびをすばやく見つけるしくみを脳で発達させ、それを人間とサルが受けついでいると考えられます。



実験で花の写真を選ぶニホンザル

川合さん提供